
ぼくらの島 ~a fabulous island ~

葉月 あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらの島 (a fabulous island)

【Zコード】

Z2799A

【作者名】

葉月 あや

【あらすじ】

邪道・ファンタジー・開幕！！！！

chapter 1 人生最大級の事件

神官殿が見ちゃつたんだって、白と黒の化け物を。

空はやたらと澄んでいた。

冷たい風は意地悪くびゅうびゅう吹くし、息を吐けば、ばかみたいに白い息が出る。

朝日は弱々しくて、影もおぼろだ。

この島、フューネアル島は四季がはっきりしていて、秋の次にはゲンキンな感じで冬が来る。

フューネアル島の民はむかしから伝統を大切にし、島を愛してきた。
とかなんとかこの島のことを紹介されてるのを、どつかの図鑑

で見たことがある。

けどさ、今時そつやつて島の呪つて一括りにしないでほしいよ。だつてぼくは伝統なんかどうだつていいし、こんな何の変哲もない島になんか、執着はないんだから。

ぼくはもうじきこの島を出る。

それはまだ決まってないんだけど、学校の先生たちが確実だつていつてるんだから、ほとんど決定事項なんだ。

本州に5つある国立上級学校（略して国学）へ行く生徒には、国からの援助金が出る。援助が出るつて事はそれなりに難しい試験も受けなくちゃならない。でも都合がいいことに、ぼくは勉強が得意だつた。

ぼくみたいな受験生たちは、島の援助で1年前から特別学級（略して特級）っていう施設に通う。施設つていっても島役所のなかの部屋を使つてるだけなんだけね。

この国は多数の島から成り、当然本州に首都がある。その国学に生徒が送られるのはかなり名誉なことだから、特別学級には島一番の教師達がつく。この教師に選ばれることも、島では相当に名誉なことなんだ。もちろん受験生になることも。

島役所への道は、すなわち国学へつづく道。家から遠いのにはうんざりするけれど、あと何ヶ月かの辛抱だ。

「おはようティオ。今日も寒いな」

いきなり呼びかけられて、ぼくはびくつと肩を揺らす。ぼくは動搖したのを隠しながら、つとめて朗らかに笑みを作つてから振り向く。相手は声でわかる。

「おはよう、ライ

ライはぼくと同じ、国学の受験生だ。

「いつもこの場所で会つな

ライはにっこりと、知性溢れる笑顔で言った。ぼくらは毎朝のように、島役所の前の噴水の広場で挨拶をする。お互の家は反対方

向にあるから、ここではじめて会うのだ。

「家が遠いからって余裕もって出発して、必要以上に早く着いたら
うんだよな」

ぼくは困った笑顔にして言った。

ライとはプライベートではあまり関わらないけれど、ぼくらはそれ
なりに話が合つたし、彼みたいな優等生と話すのは嫌いじゃなかっ
た。ライはみんなの憧れだ。

まず成績は一番だし、スポーツ万能で、顔もいいし、品行方正で、
島警察の幹部の息子だから裕福だし。とにかく例を挙げるのにも時
間を食うくらいの完成品なんだ。ほんとに同じ14歳かよ。

「俺もそうなんだ。はは、実は似たもの同士なのかもな」

ライの声は上から降つてくるから、ぼくは見上げないように注意し
て一緒に笑った。

彼は雲の上の人だから、ぼくも素直に憧れているけれど、ライの背
が平均よりもかなり高いことには閉口した。こればっかりは不
公平つてもんだ。ちょっとくらい分けてほしいよ。

ぼくらはそのまま他愛もない話をしながら歩いた。けれど島役所の
前に来たとき、その話題は回ってきた。

「ティオン、もしかしてもう知ってるかもしれないけど

ライは前置きして言った。ぼくは先を促す。

「フュー・ネ小神殿が、何者かに壊されたらしい」

その瞬間、ぼくは目を見張つて固まつた。町の騒音が、一気に遠
くなつた気がした。

特に思うところも無いこの島の中で、神殿には唯一、大切なものが
あつたんだ。

もう授業どころではなかった。一刻も早く現場に行きたかった。

そういうわけで今日のぼくは、典型的な劣等性になつてしまつた。

上の空で先生に注意されて、みんなに笑われるつていう貴重な経験もした。

終了の鐘とともに、ぼくは教室を飛び出した。島役所の中をバタバタと駆け、かばんは走りながら閉める。特級は、平日午後七時まで開講している。外はもうどつぶり夜だつた。

今日は大通りが込んでいたので、人ごみをすりぬけて、電灯の光も届かないような狭い通路を通り急ぐ。

出発しけたバスに滑り込んで、停留所で扉が開いたら、サラブレットの出走みたいに走り出した。

石畳の道を駆け抜けて、ぼくは町のはずれの小山に向かつてもう一度走り出す。

「着いた」

ぼくは膝に手を置いて、ぜいぜい息をした。あれから長い階段を上がつて、小山の頂上に登つたんだ。真冬なのに汗をかいた。コートはとつぐに途中で脱いで、腕に引っ掛けている。

呼吸を整えて、暗い低木の群れを過ぎて、件の神殿に歩を進める。目を疑うつて言うのはこうのことつだつたんだ。

多くのライトに照らされた光景は、まさに瓦礫の山だつた。白い岩を積み上げて造つた小さな神殿は、あちこち欠けて、天井も滑り落ちていた。島の反対の大神殿と対になる神殿は、その面影を残してはいない。警察と役人と、何人かの見物人がいた。

ぼくは息を呑んで、神殿の裏手に回つた。

漆黒の闇を、持つてきた懐中電灯で照らしだす。

「うそだ…」

ぼくは愕然とした。そこにあるはずの石像の姿はなかつた。石台だつたものもバラバラになり、あたりには神殿と同じ白い石片が散乱している。

でも石像が壊れたにしては、石片の量が少ないのに気がついてしま

つた。とたんにある考えにいきつぐ。

「フューリーの像は盗まれたんだ…」

ぼくはその像が大好きで、よく会いに来ていた。美術の課題ではモデルにしたし、何かいやらなことがあると、真っ先に此処へ来た。そのフューリーの像を見ていると、心が静まって、またがんばりつて気になるから…。

「なんで…」

ぼくは神殿のほうに走り出した。そしてしゃがみこんで何か調べている役人らしき人に声をかける。

「なにか、わかつた事はありますか！？」

役人らしき人はこちらを向き、『いや』と短く答えてまた作業に戻つてしまつた。

ぼくはもうどうしようもなくて、もういちどフューリーの像のあつた場所に戻つた。

フューリーの像は神殿と一緒に建てられた古い女神像で、とつても綺麗だつたんだ。

本州にいつたあとでも、帰省の折には絶対に訪れようと思つていた。それくらい魅せられていたんだ。ほんとに不思議なくらいにさ。でも、壊されたつて決まつたわけじゃないのが、唯一の救いだつた。

「還つてくるといいな…」

そう願つて、ぼくはそのまま帰るしかなかつた。

「ティオン、ティオンつてば」

後ろの席のショナンが鉛筆でつづく。ぼくはバツと立ち上がつた。教室中でくすくすと笑い声がもれる。定期試験のテスト返しで、ぼくの番がまわつてきたらしいんだけど、ぼくは上の空だった。

「どうしたの、昨日から様子が変よ？」

親切なショナンに曖昧に笑いかけて、ぼくは教卓に向かつた。

フューライ像のことばかり考えてたなんて、とても言えないよ。いまどき信心深い子供も多くはないし、身の回りに直接関わらないことに心を傾けすぎるのは、変人の特徴つてのがぼくらの常識。それから外れたら、気味悪がられてしまうだろうし。

「ティオン・ガーテステイ、よく頑張りましたね」

数学のハクトン先生が、解答用紙を渡しながらほめてくれた。見れば、前回よりずっといい点だつた。ぼくは急に誇らしくなつて、でもできるだけ平静を装つて席に着いた。

そんなことをぼくは、次の時間もその次の時間も繰り返さなきやらなかつた。要するに、今回の試験は大健闘だつたんだ。おかげで鬱々とした気分はだいぶマシになつていつた。

「ティオン、放課後暇か？」

隣のクラスのライが声をかけてきた。特級は2クラスある。「オレは別に暇だけど…」

ぼくは一人称を、きちんと‘オレ’に直してして答えた。‘ぼく’はガキっぽいつて、昔からかわれたことがあるからだ。

放課後ぼくらが遊ぶなんて初めてだつた。ただでさえ特級のメンバーはライバル同士。みんなさすがに表には出さないけれど、お互いに壁を作りがちだ。それは競争心をあおる教育をされているからか、人間関係にも多少は影をおとしているらしい。

そんな中ぼくらは国学行きが確実とされているし、誰といがみ合う必要もない。けれど放課後にこうやってつるんだ事もなかつたから、なんだか変な感じがした。でもうれしかつた。島役場に通い始めてから3カ月が経つ。まともな友達をつくるなんて半ばあきらめていたところだつたから、よけいに気持ちが明るくなつた。

そうだ、成績上位者ならすこし余裕があるだろうし、ちゃんと踏み込んだ会話でもしてみようかな。受験が終わつたら、同じ学校の生徒になるかもしれないんだし、わりとすんなり親しくなれるやつも、

結構いるかもしない。

「なあ、ティオンの家に行つてもいいか？」

ライはいつもの笑顔で言つた。

「ああ、別にいいけど遠いよ？」

「別に構わないよ。まだ早いし」

今日はクインの日で、授業はいつもより早く終わつて2時までだつた。一週間はソイルから始まつてコイル、ツアール、ネルル、ノエル、クイン、ニフルの順でめぐる。

島学校のやつらはクインの日も休みで、一般的休日のニフルとあわせて2連休になるんだ。ぼくらのは1・5連休つてかんじかな。しかもあと半年くらいで、休日返上つていう恐ろしいハードルが待つてゐる。ただでさえ朝7時から半日、完全拘束されてゐるのに、ほんと嫌になつちゃうよ。

「ティオン家ちつてパン屋だつたんだな」
ぼくの家の前で、ライがつぶやいた。看板は『ガーテステイ・ベーカリー』とか芸のない店名を世間に知らせている。

島役所からここまではバスと徒步、合わせて1時間半かかる。ぼくの家の地域は階段の多い造りで、狭い路地も迷路みたいに入り組んでいるからバスも通つていない。ライの家は、役所を挟んでぼくの家の反対側で、通学時間は約40分。帰るのが大変じゃないのかな、と今更ながら、時計を見つつ思つた。

「あらおかえりー！」

母さんが、ばかでかい声でカウンターから言つた。そんな声を出す必要があるほど離れてなんかないのに、恥ずかしいな。

夕時まで、まだ時間があるからか店は暇だつた。父さんはたぶん奥でパンを焼いている。

「お友達連れてきたの？」

「特級のやつ」

すると母さんは、あり、を何回もくり返した。ぼくはやつぱをむいた。

「素敵なお友達ねえ！ティオンったら学校変わつてから友達の事ぜんぜん話さないから、友達が出来てないんじやないかって心配してたのよ。ほらこの子、変にこまつしゃくれてるから、むかしつから難しくてねえ。ほんと仲良くしてやってね」

ぼくは母さんをにらんだ。母さんは必要以上に話すから、裏口からこつそり入りたかったんだけど、そうすると後でオーババアになる。昨日は帰りが遅くなつて怒り狂つたあとだから、余計にひどい事になるだろう。普段でも、母さんのいない方から入ると小言クソババアになる。我が家の方針に従えつて怒鳴つてさ。

「ええ、もちろん」

ライはきれいな笑みをして会釈した。

もうそれだけで充分だつた。母さんはライにノックアウト、いちころつて感じだつた。目がすでにハートマークになつてている。ぼくは顔をひきつらせた。するとライの奴は、満足げに一コツと笑つて見せたんだ。

2階の部屋にあがつて、ぼくは乱暴な仕草でベットにかばんとゴートを放つた。

「今回の試験良かつたんだつて？」

ライがベットに方向転換した椅子に座りながら言った。彼の皮製の上等なバックは、ぼくの机にきちんと置かれる。ゴートはその横に、礼儀正しくたたまれている。

「なんで？」

ぼくはちょっとびっくりひみつと言つた。一階の最悪な空気が抜け切つていなかつたからや。

「そういう噂はすぐにまわつてくるよ。俺らひとつとは一番の関心事だろ」

「そつか」

まあ、納得だな。

「お前、俺のいつこ下だつて」

「はあ！？」

聞いて、ぼくは目をまるくした。順位が出るのは答案が出てからもうちょっと後のはずだ。本人も知らないような情報なんか、誰がいつ集めて発信しているんだろう。なんていうか、水面下の競り合いの激しさが伺われる現象だ。

「てことは2位！」

ぼくはちょっと遅れてそのことに反応した。ライもいまの間を不審に思ったようだが、それを空気に出したのはほんの一瞬で、すぐに苦笑に直した。細かいところまでアカラサマでないのは流石だ。まあそれは置いといて、

「オレつてすげー」

順位のこと、自画自賛してしまつ。

前回は80人中7位だった。だいたい15位くらいが、合格者のボーダーライン。特級で切磋琢磨する中、順位を上げるのはかなり大変なことなんだ。

「なにか特別なことでもしたのか？」

ライは足を組んだ。

「いや別にこれといつて」

正直に答えた。するとライは模範的な笑みをうかべる。

「ふうん。セオリー通りの優等生の答えだな」

ぼくはドキッとした。なんだかライの瞳の中に陰があるような気がした。なんとなくだから自信ないけど。

もしかして、嘘をついたとでも思われたのだろうか。でもほんとう、今までどおり普通に授業を受けて、勉強時間だつて増やした覚えは無い。これ以上なんて答えればいいんだろう。

あれ、待てよ、ていうかその前に、そんなこと責められるいわれなんかないよ。

第一ライ本人が、どうあがいても誰も敵わないような天才タイプだ

つて地元でも有名だつたらしいから、ぼくがガリ勉していようがいまいが気にすることでもないんじゃないかな。やつぱ気のせいいか。

困惑しているぼくを見てライは、

「俺、そう答えて失敗したことがある」

と言つて頭の後ろで腕も組み、そのまま椅子に軽くのけぞつた。

ああそつか。たぶんライは、さつきのぼくみたいに答えて、嫌な空気を向けられたことがあるんだ。それで何か思い出したんだろうな。きっとそうだ。

「ライ、小神殿のことなんだけど」

そう言つただけで、ライは欲しい答えをくれた。

「犯人の目星は付いてないらしい」

ライの父は警察関係者だ。だから何か情報が得られるかなつて思つたんだけど、聞かなきゃ良かつたな。

「そつか」

ぼくは肩を落とした。もつ話題を変えよ。

「ライは、家族そろつて本州に行くんだよな」

ライの父は今年度で島警察の任期が切れて、来年度に家族そろつて本州で新生活をはじめるつてことだつた。年度始めは9の月だから初秋だな。

「ティオンは寮住まい？」

「ああ、なんかせいせいする」

そしたらやつと小言から開放されるんだ。待ち遠しいくらいだよ。

「ふうん。不安はないのか？見知らぬ土地で、勉強も大変でさ、しかもハイレベルなライバルたちに囲まれて」

「別に。行つたら行つたでなんとかなるんじやねえ？ていうか、それならライも同じだる」

「まあ、そうだな」

「それに地方出身のやつなんて、ほとんどは寮だし。みんなができるならオレにもできるよ」

ライは軽く田を見開いた。

「ティオントて、強いんだな」

「やう、なのか」

よく分からぬいけど、ほめられてしまった。別に、特別な事なんか言つたつもりはなかつたんだけどな。でもまあ、悪い氣はしないからさ、素直に喜んどこい。

妙に照れてしまつてぼくはライの方を向いていられなくなつた。あさつてに向こうとすると、

「ティオン、言い忘れたことがあるんだ」

ライの声に止められた。

「何?」

「小神殿な、実は不審な点があるらし」

ぼくは突然真顔になつて迫つた。ライは引いているが、気にしてなぞいられない。

「変な話なんだけど、まあ、落ち着け、ぐだらないつて笑うような事だから言ひ忘れてたんだ」

「早く言え」

ぼくはさうに迫つた。もう鼻先がくつつきそつな距離だつた。だからライはぼくの両肩を押しやる。ぼくはそれでもまだ迫りうつとする。

「わかつた、離れたら言ひ

すんなり離れてやつた。ライはため息をもらす。

「どうやら神殿の破損部に、歯形らしきものがあつたそうだ」

ぼくは口を密けたまま固まつてしまつた。

「なにそれ

「な?おかしいだろ」

「なんだそれ」

「どうした、笑えよ」

「見に行く

「は?」

ライは田を見開く。

「何しに行くんだよ」

「だから、見に行くつってんだよ」

「まさか、今からか?」

「ぼくはうなずいた。

「ここからだつて、近くないだろ。俺はさすがに行けないよ

「1人で行く」

ライは面食らつて何か叫んだ。でもぼくはライの言葉も聞かず、ベットのかばんとコートをわしづみ、そのまま階段を滑るように降りた。裏口を通りうとするが、急ブレーキして店先へ行く。上からまたライの声が聞こえたが、耳を通過してしまつ。

「母さん、ライの接待して!!」

カウンターの母さんに捨て台詞。

「はー?」

母さんがその後なんて言ったのかはわからない。ぼくはすでに通りを走り、バス停を目指していた。

時計を見るともう5時近い。ぼくはまた、ぜいぜい息を切らしながら町はずれの小神殿に来ていた。

冬は日の沈むのが早くて、太陽は西の山々にさしかかっている。南には遠くまで広がる街並み。その先の入り江、輝く海原。島全体はオレンジ色に染まっていた。

島の中心ではアングルード大山がきれいなような、不気味なようなたたずまいで全てを見渡していた。

ぼくは小神殿のほうへ歩く。人影はない。太い紐で張り巡らされて『立ち入り禁止』の看板がいくつか吊るされていた。

小神殿は本当にこちんまりとした神殿で、もともと神官は住んでいない。この小山のふもとに交代で住んで、管理の必要からひとりふたり見回りに来るだけだった。これからはどうなるんだろう。さまざまな検証は、もうなされた後のことだ。文化財として重要

なものだろうから、下手にさつさと撤去もできず、とりあえず立ち入り禁止にしている、といったところか。

ぼくは躊躇せず、紐をぐぐり中に入った。

どうしてもいま、来なくちゃいけない気がしたんだ。この目で確かめたら、もしかして何か分かるんじゃないかなって思ったから。ぼくは何かの専門家ってわけじゃないけど、こればかりは人任せにするなんて、とてもじゃないけどできなかつた。

ぼくは手当たりしだい、瓦礫を見て回る。けれどおかしな点なんてどこにもない。

「歯形つてなんだろ」「う

きつと、そう見えるなにかがあるはずだ。

と、そのときぼくは妙な音を聞いた。

じつと息を殺して、神経を集中する。なにか、ゴリゴリといつ、硬いものがこされるような音だ。かすかな音。

心臓が早鐘を打つ。冷や汗がつづつと頬を伝う。逃げ出したまゝがいいのだろうか。

いや、ここまできて、まだ何もわかつていられないじゃないか。腹を決める、ティオ。

ぼくは唾をのんで、胸のあたりをかるく叩いた。よし、いける。できるだけ気配を消し、音のするほうに歩み寄つた。

崩れた壁にぴたりと背中を押し付け、その影から、そうっと裏をのぞこうとする。なにかの襲撃に備え、しつかりと構えて、しかし逃げの構えも同時にして、裏を、そうと見た。

「う…」

ぼくは目をひくつかせた。思いつきり力が抜けた。

なんの事はない。少なくとも想像していたよりもずっと。

そこには小汚い茶色いフードを被った女の子が、壁に背を向けてしゃがんでいた。両手には神殿の白いかけら。たぶんすり合わせてゴリゴリやっていたのだ。

力いっぱい警戒してこれだ。ぼくは変な恥ずかしさから妙にむかついてきた。

むつとした表情で女の子を見下ろす。顔はフードに隠れているけれど、袖から見える手首とか指の感じがどう見ても女の子のそれで、背格好から考えてぼくとそう変わらない年頃のようだ。

そんなやつが、こんなところで一体なによつてんだよ。人のこと、驚かせやがって。

勝手にぐいっとたつてのはこのせいに置っこい、ほんとに腹が立つてきた。

「おい」

ぼくはかなり不機嫌な声で呼びかけた。女の子の肩がびくつと揺れる。

「あ、おいー」

少女は突如走り出をついた。驚いて、ぼくはとっさに彼女のフードを掴んだ。

反動でくいっと一瞬彼女の首が絞まり、女の子はかるくのけぞつてしまつもちをつけてしまつた。

「え…」

いきなり目に飛び込んだのは彼女の真っ白な髪だった。

不揃いなおかっぱは、まぎれもなく純白。こんな髪の色は見たことがない。女の子はぼくに背を向け、うつむいたままだつた。

「あ」

ぼくは面食らつたまま掴みっぱなしのフードを見た。かなり強くひつぱつてしまつたから、首、痛いんじゃないかな。悪いことしたな。気が動転して、ぱつと手を離す。けれど彼女は逃げなかつた。

「… イオン…」

女の子はちいさな声でつぶやいた。なんだ、いまのは。

なにかの聞き間違いかとおもつたけれど、その声は今度こいつを聞いた。

「ティオン…」

ぼくは後ずさつた。

「ティオン…」

女の子はその言葉しか知らないみたいにくり返した。ぼくは何が何だかわからなくて、動くことさえできない。

そういうひじいてこむつけで、彼女はゆっくりとこちらを向いた。

「あ…」

ぼくはさらに後ろへ引いた。

女の子は、作り物みたいにきれいな顔をしていたんだ。

肌は象牙くらい白くて陶器のように滑らか。切れ長の大きな瞳は、深い森を思わせる澄んだ濃いグリーン。すっと通った高い鼻に、うすく色づいたちいさな唇。

どこまでも整っていて、髪の色と合わせると天使をおもわせた。あれ、待てよ、てことは…。

「もしかしてぼくは、知らないうちに死んじゃったのか？」

突拍子もないことを口走つて、とっさに頭を振った。いまのアホらしい発言による反応を見るために、彼女の方を見たけれど、女の子は無表情で首を傾げてみせる。

「ひょっとして、言葉が通じないのか？」

首がさらにかたむく。

「どうしようつ

落ち着け。思つにこれつて人生最大の事件になるかもしれないんだぞ。

廃墟となつた神殿、謎の少女。おそらくは異邦人だ。小汚くてボロいフードのコート一枚を着て、隠れるようにうずくまつていた綺麗な女の子。

「もしかして、人身売買でもあつたのか？おまえ、そこから逃げてきたんじゃないのか？」

やはり少女は表情を変えず、大きな目をぱちくりするだけだった。

「ティオン」

そうだ、大事なポイントを忘れてた。なんでこいつ、ぼくの名前を

知つてゐるんだる。しかもぼくの顔も見ずに呼んできたし。

「なあ、おまえは誰なんだ？」

だめモトで聞いてみたけどやつぱりだめだった。

ぼくは自分を指差して。

「ティオン」

と言ひ。そして少女を指差した。もう一度同じ動作をして、再度彼女を指差す。

すると女の子は軽く手を見開きはつとして、

「フューリー」

とだけ言つた。

「はあ？！」

ぼくは表情筋をフルに使って『なに言つてんの』という顔をした。

すると彼女はぼくを指差し、

「ティオン」

それから自分を指して、

「フューリー」

と言つた。ああそれか、そうきたか。まあ、ちゃんと考へれば想像もつくよな。これだけ綺麗だつたら、親にしたつて娘に女神の名まえくらい付けくなつちやうか。しかしまあ、マニアックだな。なんだつてこんな地方の島の女神の名まえなんか付けるんだよ。なんかの神話の本でも読んで、知つたとかなら納得いくけど。

「じゃあフューリー、おまえ、ここで何してたんだ？」

またもやフューリーは目をぱちくりさせた。ああもう、めんどくさいな。ぼくは神殿の白いかけらを拾い、フューリーにそれを手渡して指差した。つぎに彼女を見る。

「なにしてたんだ」

フューリーは聞いていないのか、じいっとその石を見ていくる。すると何もいわず、彼女は石に顔を近づけていき……。

「え

そのまま。

口をあけて。

かぶりついたんだ。

「う、うお」

フューリーは石を、パンみたこにまおばつて『ココ』『ココ』やつてこる。

食つている。さつきの音の正体はこれだ。

ぼくは腰が抜けてしまつちをつき、そのままの姿勢でカサカサと後ずさる。

「お、ああああ、お、これは、な、なな、うおお」

大混乱して口をパクパクさせる。たぶん顔は真つ青だ。

怖い。

けれど田が離せない。

ゴリゴリ…ゴリゴリ…

ぼくの頭もかじつたら、あんな音がするのかな。と思つた瞬間、恐怖が頂点に達した。本能が逃げろと叫つてゐる。けれど背中を向けたら追いかけきそうだ。

身動きが取れない。けれどこのままじや…。

「ティオン」

「よ、呼ぶなあ…！」

ぼくは涙目になつて叫んだ。なんだつていうんだよ。なんでもぼくのこと知つてるんだよ。なんで石食うんだよ。わけわかんないよ。

「ティオン…」

ぼくの訴えをよそに、フューリーはまた呼んだ。

「黙れよ…だいたい…」

言葉は途中まで途切れた。フューリーが、うすく微笑んでから、どういうつもりか突然歌い始めたからだ。

「チュメタイクアデニ フクアレタラ
アツタクアイ オウティニ クアエイマヒョ…」

知つてゐる、このフレーズ。発音は変だけど、いつか歌つてゐる。『冷たい風に吹かれたら、あつたかいお家に帰りましょ』

「なんで…？」

フューリーは続ける。

「クアナシイ クイモツイニ ナツタナア…」

悲しい気持ちになつたなら。そつだ、僕は続きを知つてゐる。

「きれいな おはなを さがしましょ」

ぼくが歌うと、フューリーは半分開いた目でぼくを見て、またうすぐ笑つた。

どうじうことなんだよ。だつて、その歌。

「おまえ、それ、どこで聞いたんだ？」

ガキのころぼくは、よく女神像の前に来て泣きながらその歌を歌つていた。ちょっとバカラしい話なんだけど、悲しいことがあるたびに。

どこかの本で見た詩に、子供特有の自作のメロディーをつけて完成させた歌だ。誰かの前で歌つたことなんかない。

ぼくは立ち上がり、フューリーの像のあつた台座のほうへ行き、試しこそこを指差してみる。

するとフューリーも立ち上がり、ぼくのほうへ来て、ガタガタになつたその台座の上に立つて微笑んだ。

いつたい、なんだつていうんだよ。まさか、おまえがあの女神像だとでもいうのかよ。ありえねえよ、そんなの。絶対信じるもんか。だいいち姿だつて全然ちがうじやないか。しかも女神像はこんなガキじやなかつたし、背丈は階段2段分くらいの大きさだ。だからといって、じやあなんだと言われれば、結論なんか出せない。ぼくは何かの専門家でもないし、結局なにを目の当たりにしても、なんの答えも出せやしないんだ。

保留にするしかないじやないか。結局わかっていることは、こいつが石を食つ怪物で、ぼくの名まえを知つていて、あの歌を知つているつて事だけなんだから。

そういうしてゐる間に、フューリーは台座をかじり始めた。

ほんとうに、人生最大の事件だ。こんなわけのわかんないものに遭遇するなんて。

「ありえねえ…」

でもそのときのぼくは知らなかつたんだ。

その、人生最大の事件、が、それから容赦なく更新され続けることになるなんて。

「あんた、なに考へてるの…！」

目を吊り上げて、赤鬼になつた母さんが、家全体を揺るがすように怒鳴つた。覚悟はしていたが、やっぱりすごい迫力だ。父さんが奥で苦笑いしている。

「あれから大変だつたのよ！ライ君たら怒つた様子も無く『おいとましますね』とか言つてくれて、母さんは身の縮む思いだつたわよ…！…だいたい昨日もやたら遅い時間に帰つてくるし、ビうごうこう事なのよ、いい加減にしてちよつだい…！」

「昨日の分は昨日怒つたからいいじゃん…」

まずい、口が滑つた。

「ティオン…！」

落雷だ。

ぼくは強烈な平手打ちを食らい、それから夕飯抜きでみつちり説教されたのだった。

「うあ、疲れた…」

さんざんしぼられて、くとくになつてから部屋にたどり着いた。思つたとおり母さんは、ぼくがコートを着て帰らなかつたことにほ気づかなかつたようだ。

ぼくは窓際に向かう。1時間ちかく待たせちゃつたな。

窓を開け、下を見る。通りと反対側の裏庭にいる人影に手を振つた。

ぼくのコートを着たフューアイだ。そのまま置いてくるのはなんとかわいそうだと思つて、子犬や子猫を拾うノリで、連れてきてしまつたんだ。

これは、ぼくなんかには田もくれず白い石ばかり食べていたので、人畜限定に無害と判断した結果だ。

フューアイには、ボロコートじゃバスに乗せられないからって、ぼくのロングコートを着せてある。まあ裸にコートで、髪の毛を隠すためにフードを被つてゐる、なんてスタイルじゃ、人からの冷たい視線は免れなかつたんだけどね。近所の人見られないように、裏道使って大変だつたよ。

フューアイも手を振り返す。そして、ぼくはよく本で読むよつなことを実行した。つまり、カーテンとかシーツをつなぎ合わせ、ロープを作つて垂らしたんだ。地面には届かないけれど、フューアイが掴めるくらいには長かつた。

あれ、でも本ではこのロープの先っぽを、びこひこひりつけてるんだろう。この部屋には柱もないし、ベットの足にくくくりつけなんかしたら、すれ母さんたちのいる 1階の部屋に響くぞ。

ぼくは下を見た。開け放しの窓からは、信じられないくらい冷たい風が入つてくる。

フューアイのコートが寒そうに揺れる。

やるきやつないね。

「ん~、う、くううう

ぼくは、こめかみの血管が切れるんじゃないから、力を込めて手製ロープを引つ張つた。声もできるだけ控えめに、柱の代わりをはたそうとする。

でも、なんかおかしいぞ。引っ張つてゐのにつままで経つても登つてくる気配がない。重さはかんじるのに、どうしてだらう。一度力を抜いて外を見下ろした。するとフューアイはロープの先を掴んでいるだけだった。

ちがうよ、ぼくが引き上げるんぢゃなくて、おまえが登つてくれる

んだよ。くやしいけど、そこまで力はないんだぞ。

ぼくはまさに言葉に表せないくらいの苦労をして、ジェスチャーでそれを伝える。引っ張り合つて確認し、よつやくフューリーが登つてきた。

ドサツ

登りきつたとき、フューリーも疲れたのか窓枠から落ちてきた。しかもぼくの上に。

「痛えな…」

重いので腕で押して、どかした。すると彼女のコートがはだけて足の大部分があらわになつた。よつするに、腿ももとか…。ついでに髪が乱れて白いうなじまでのそく。うつろな瞳なんかも。ぼくは急いで手をそらし、彼女からすばやく離れた。

「ティオン…」

「うつちくなな、いま、ちょっと待つて」

手をふんぶん振つて、顔で語る。ちょっと、落ち着けよ、オレ…！
フューリーはまた無表情で首を傾けた。

とまあわかる人にはわかるピンチを乗り越えて、ぼくは平静を取り戻した。

その後窓を閉めて、部屋をもとのように戻し、フューリーを薄手の毛布でくるんで、ぼくは人心地つく。カーテンやシーツがよれよれているのはまあ、洗えば直るか。

「外寒かつたら」

何をどうエネルギーにしてるのか、フューリーには体温があつた。だから当然寒いところにいたら冷えるだろう。当然なんて言葉があるはまるかどうかは別として。

ぼくは一度下に降りてホットミルクを作つて持つてきた。

「飲んだら？」

フューリーはカップを受け取つた。けれどそれを飲もうとしない。カップの熱いうちはそうつと、持ちやすい温度なつたら心なし、いとおしそうに持つていた。

やつぱり相当寒かつたんだな。表情の変化は小さいけれど、よく見るとわかるのが面白い。

「やっぱ飲まないのか？……て、おいつ」

フューアイはカップをかじった。カップには歯形がついている。ぼくは口をわなわなさせる。

一時忘れかけてた怪物っぷりを、まざまざと現せつけやがって。こんな調子でこいつ、文化財たる神殿を食つたんだ。ほんとにもう、なんであつさ、こんなやつに変な気なんか起こしかやつたんだらう。

見れば、フューアイは眉根をよせて『まよい』といつ顔をした。なにそれ、味の違いとか、好き嫌いとかあるわけ？

「つてああー！もつ一箇所食つて確認すんなよ！－！」

フューアイはカップを再びかじり、味の確認をした。思つた通りまた『まよい』つて顔になる。

ぼくはカップを取り上げて、中のミルクを飲みほした。つえ、ちょっととかげらが混ざつてたみたいだ。

フューアイはぼくの様子なんか意に介さず、部屋の中心に吊るされた電球を眺めている。

これはもしや…。

「電球食つなよ…………だから食つなつて！－！」

ベットに立つてから電球に顔を近づけていくフューアイの頭を、ぼくもそこに立つて、大急ぎで両手で掴んで固定した。

ティオングにしてるの？

下から母さんの声。ぼくはどきつとした。でも思い直す。

母さんは昼間でなければめたなことがない限り、普段は上には上がつてこない。夜はぼくが勉強しているからだ。夜食を持ってきてくれることもあるけれど、今日はさすがにないだろ？。いまだつてちょっとうめさかつただけだし。でも、気をつけなければ。ぼくは枕の上に座り込む。フューアイはまだ立ちっぱなしだ。

「座れよ」

ぼくは小声で言つて、布団をぽんぽん叩いた。しかし彼女の反応はない。仕方ないのでぼくはもう一度立ち上がり、彼女の肩に手を置いて、重さをかけて座らせた。つたくもつ、こいつ言葉が通じないだけじゃなくて、ひどく察しが悪いんだ。

時間はまだ相当早いんだけど、ぼくは2つのベルが付いた目覚まし時計を枕元に置いて毛布を被る。

フューリーが普通の女の子なら、ベットに寝かしてぼくは別のこところで寝るんだろうけど、相手は怪物だからそんな使いにはしない。それにこの寒さは耐えられないし。

フューリーはぼくの真似をして、ぼくの横にこりんと横たわった。厚手の毛布は3枚あって、2枚をいまぼくが被つている。怪物とはいえ『入つてこいよ』なんて口が裂けても言えない。

やっぱり外見は同世代のむちゅくちゅ 綺麗な女の子だ。

「ぼくのコートも着てるし、平氣かな」

ぼくの言葉なんか関係なしに、フューリーは長いまつげを伏せる。また不思議なことに、それからすぐに寝息を立てはじめた。まるで人だな。ものすごく変なものばつか食べるけど…。

ぼくは垂らしていた紐を引いて証明を消した。

そしてさらに不思議なことも気がついた。こいつ、汗までかくのか。

「おまえの頭、臭え…^{くせ}…」

明日になつたら洗つてやるわ。マジにおまえは何なんだよ。

今日はほんとにいろいろなことがあつたな。思ったよりも相当疲れていたのか、まぶたを伏せると、すぐに意識は沈んでいった。

chapter 1 人生最大級の事件（後書き）

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。次回、とて
つもなく胡散臭い人物が登場します。乞うご期待です m(^ ^)

m

ジジジジロジジジジ…

ベルの音、なんか変だぞ。
ぼくは目をさます。けだるい身体。よれたシーツ。横には絶世の美女
少女。…とまあ、男が見がちなドリームだと世間に浸透しているよ
うなシチュエーションは置いとして。

ぼくはフューリのほっぺたを両手で挟み、ぐにぐにやった。彼女
は迷惑そうに眉をしかめて充血した目を開く。まだ眠いらしい。で
もそんなの気にしていられない。ぼくは顔に青筋をつかべながら表
情で『ベル、食うなよ…………』と訴える。

田覚まし時計のベルは、見るも無残に食い荒らされていた。ハン
マー部分が戸惑つようこづりこづりして、申し訳程度に残ったベルに、
時々当たってむなしく音を出していた。
お気に入りのネジ式田覚まし時計、高かつたのに。機能はほぼ無事
だつたから、ベルの部分を交換してもうね。修理代、かかるなあ。

「静かにしようよ」

部屋のドアの前で、フューリに一応いつておく。

現在午前4時30分。まだ日は昇つてないから真っ暗で、夜の気配
が色濃いっていう時間だ。

とりあえずこんなに異常に早起きしたのは、母さんたちに見つから
ないよ(ひ)こつそり家を出るためだ。

実際、田覚まし時計が鳴ったのは4時。月2日の休業日以外、父さ
んと母さんは、パンを焼くために5時には起きて活動を始める。
だからその前に家を出なくちゃいけない。

特別学級に行く前は、生地の仕込みとか、朝の店開きの準備とか手
伝わされてた。最近は毎日の掃除と、二フル(休日)の朝の仕事く

らいかな、手伝えるのは。

フューアイは、綿製の薄手の服を2枚と、その上にセーター、ちょっとよれたぼくのコートに厚手の短パンにロングブーツといういでたち。

ロングブーツは以前、ばあちゃんにもらつたものなんだけど、ぼくにはちよつと派手で、女の子向けて見えたから、クローゼットの奥に潜ませていたんだ。ブーツは以前のぼくのサイズで、フューアイの足にはぴったりだつた。日の出を見れてよかつたな。

とまあそれはいいんだけど、恐れていたとおり、フューアイの着替えを手伝わなきや、いけなかつた。

できるだけ見ないように気をつけたんだけど、彼女の姿が限りなく人間に近いっていうのはわかつてしまつた。ほんとオレつて……で、でも、できる限り急いで現在仕度は完了した。

「うえ、さみ寒い」

家中の中でも、毛布から出るのに多大な勇気がいるくらい寒かつた。ましてや外は、殺人的な極寒の世界だ。ぼくらは身震いして、上下の歯をがちがちさせた。

濃霧に包まれる暗闇の町。階段だらけの入り組んだ路地に人気はひどい。

ぼくが灯りをつけると、ぼくらの周りだけがほんやりと明るくなつた。

「うーん……」

それにもしても、どうしよつ。

フューアイをあのまま家に置いておくのが不安で、連れ出しちやつたけど、とくに何をする予定もないな。まだバスは走つてないし、持ってきた田舎まし時計を修理に出そうにも店が開いているわけないし。とりあえず市場にでも行ってみよつか。

無言のまま、暗い道をふたりで歩く。歩き続けたらちよつとは寒さ

にもなれるかなって思つたんだけど、ちつとも温まらない。たぶん、昨日昼から何も食べてないせいだ。

電灯のある通りに出て、ぼくは灯りを消した。

歩きながら横目でフューアイを見る。ぼくは、すこし高くなつた歩道を歩いているのに、車道を歩く彼女のほうが背が高い。

横に並んでいたくなくて、ぼくは歩調を速めて彼女の先を歩く。けれどフューアイも真似して速く歩き始めたから、並んで競歩をしている状態になつた。まるで意味がないから、結局、もとの速さにどす。

なんだか疲れてしまって、歩道と車道の小さな段差を椅子に見立て、ぼくは座り込んだ。

腹減つたなあ。しくじつた、パンのひとつやふたつ持つてくれればよかつた。気持ちが急いたにしても、痛恨のミスだ。もう、いまさら取りには行けないし、我慢するしかないが。

ふと、幾度となく感じた空気が流れる。

フューアイはどこだ。どこにいる。視線をスルーさせていくと…。
「何してんだ、こりあ…！」

まさにいま民家の壁の角をかじつているフューアイの姿が目に飛び込んだ。

早々に駆け寄り、二口目^{ふたぐちめ}にこうとする頭をペシッと叩くと、渋い顔をしながら彼女がふりむく。ああもう、角が欠けてるじゃねえか。

「なんだ、文句があるなら言つてみろよ」

名残惜しそうにレンガの壁眺めてから、フューアイは恨めしげな目で語つた。

容易に想像がつくね。『なんで？ テイオン私の邪魔するの？』 だろ？

「ここは人が住む家だからだよ！ レンガが気に入つたんだか知らねえけど、この島の建物はほとんど人が、いままで、使つてるもんなんだよ！ おまえが食つていいもんじやねえ！ 聞かなくても理解しろよ…！」

ぼくが説教たれているのは、鈍なフューアイにもわかつたらしい。

唇をちゅうと突き出して、不満をあらわにしてみせた。

その後、立ち並ぶ家々や、ちょっと欠けた階段や、今は何も咲いてない花壇のレンガを恨めしそうに眺めているフューリーを横目に見つつ、ぼくは気が気じやなかつた。もう、いいかげんしてくれよ。またしばらく歩いているうちに、町は少し明るくなつた。まだ夜明け前だけど、朝の気配がそばにあるのを感じる。人もちょっとずつ、見かけるようになった。目立ちすぎる白髪を隠すため、フードを目深に被つたフューリーを一瞬不審がる人もいたが、ぼくらが堂々としていたから、そんなには気にしなかつたみたいだ。

「おまえ、その髪の毛を隠すつていう知恵は、一応あつたんだな」彼女は昨日のように、不揃いの真つ白なおかつぱを隠していた。けれど次に向かいから風が来たとき、彼女がフードを押さえるのを見て訂正した。いや、たぶん知恵じやなくて防寒のたまものなんだろうなつて。

「しつかし、すげえ冷えるな」

夜明け前がいちばん寒い。青い町は霧のなかにある。もしも雲の上の町があつたら、こんなふうなんだろうなつて、ぼくはほんやりと考えていた。

ほどなく電灯が、いつせいに消えた。

時刻は5時30分。

市の行われる広場は、すでに人々でごつた返していた。ぼくはフューリーの横髪を耳にかけてやり、白髪がさらに目立たないよつにした。そういえば髪、洗つてやんなきやな。

「あつちに出店がある」

この島の人たちは自営業でないかぎり、ほぼ毎日の朝食は外でとる。それは飲食店である。それは飲食店であ

つたり、出店であつたり、家族たちはそれぞれのペースで朝をすこ

す。

ぼくん家の店にも奥にフロアがあつて、朝は忙しい。平日の朝と夕時（いっちはもっぶ

ら買い物、フロアは暇）は、パートさんに入つてもらつてるんだけど、ぼくが特別学級に通い始めてからは1人増やして3人になつた。みんな優しいおばさんだ。

うちは自営業だから、ぼくん家には家族+パートさん（平日）との朝食つていうのが週

慣づいている。こうして外で吃べるのは久しぶりだつた。

「へえ、二フル（休日）でも結構、店が来てるんだな」

勤め先や学校へ行く人も、二フルには自宅で吃べることが多いんだけど、こうして市場にくる人たちのために出店が来ている。でもこんなに多いとは思わなかつた。

ぼくらは市を通つて、目的の場所へ歩を進める。野菜売り、果物売り、魚売り、雑貨、アクセサリー屋、籠やら靴やら草鞋まで売つてゐる。フューアイはそれらを物欲しそうに見ていた。

「どうした？」

なにか噛み付きたいものでもあつたんだろうか。フューアイはアクセサリー屋で立ち止まり、しゃがみこんで品物を見ていひ。視線の先是、翡翠のペンダント。

「それ、いくら？」

フューアイが今にも石に噛み付くんじゃないかつて、ハラハラしながら、ぼくはそれを買つた。

壊れた目覚ましの入つたかばんから財布を取り出す。修理代、足りなくなつちやつたな。でも背に腹は変えられない。

「ありがとうございました」

首飾りを受け取ると、女店主のさわやかな声を背中に、ぼくはフューアイの手をひいて、足早にその場を去つた。

フューアイはぼくの手にある碧の石をじっと見ていひ。もうちょっと待てよ、ぼくもなにか買つたら、人気のないところを探して一緒

に食べればいいだろ。

そんなぼくの様子を見て、フューライが唇をかみながら、ぼくを睨みつける。

『なんで、その石くれないの?』って、そうこうついた。

「な、なんだよ」

急に睨まれたもんだから、ちょっとむかついた声で答えてしまった。すると彼女はぼくの手から首飾りを取り上げて、そのまま噛み付いたのだ。

「あ、おまツ、ひら」

しかし幸いフードと喧騒に隠れ、音も事態も目立たなかつた。ぼくはフードを軽くパシッとしたく。ほつとするのもつかの間、田の前には鼻水を垂らした幼い少年がフューライを見上げていた。まだ小さなその子には、フードの中の秘め事が見えていたはずだ。ぼくは冷や汗をかいだ。

騒ぐか、と思つた。けれどその子はひどくおつとりした様子で、パリHの店主である

母親のところに行き、

「かあちゃん、翠の石つて食べれるの?」

と言つた。しかし、

「何言つてんだい

と小突かれて取り合つてもうえなかつた。ぼくはまつと胸をなでおるす。

「ピンチだつたなフューライ?」

横にいたはずのフューライがいない。ぼくはあたりをキョロキョロ見回した。なのにどこにも見当たらない。

鼓動が早くなる。ぼくは考へうる最悪のことを思い浮かべた。

いまにもどこかで悲鳴があがらないか、ざわめきが起こらないか…。ぼくは人ごみをすり抜けて、息を切らしながらあちこち探し回つた。捕獲されるフューライ、いままさに何かにかみついているフューライ…。誰かに捕まりでもしたら、どつかの研究所がなんかに送られて、解

剖されちゃうかもしない。そもそも悪いことが頭をめぐって、思つよつに足が運ばない。

大体、食べ物の恨みくらいで、あんなムキになんなよな。ぼくの何が悪いんだ。ものの道理がわかつていなかいつが悪いんだろ。でもまあ、あいつの身になつてみれば、ちょっとは悪いことも、したような気もさ、しないでもない。見つけたらどつか別のところにでも、連れてつてやろう。

だから、頼むから問題は起こすなよ。ぼくは強く思つて、また人ごみをすりぬけながら広場を探しはじめた。

「『お母さん、わたしに本当のこと教えて』蝶子は言いましたあふと、足を止めてしまった。

なんだか、ああ、紙芝居か。それにしても、ちょっと内容が重くないか。でも絵柄はかわいい感じで、そのミスマッチに惹かれた大人や子供が見入っている。

話し手は薄紫色のコートをまとつて、広間の端の、花のない花壇の淵に腰掛けている。

裾の長い上着は、袖が肘から手のほうにかけて広がっている形で、フードを被り、目から下を布で覆つていて、まるで典型的な占い師みたいな格好だ。

「お母さん蝶子は、まだ青虫の蝶子に、真実を話しましたあーしゃべり方はどこか変わつているけれど、占い師もどきの声は、喧騒にもよく通つてる。男とも女とも知れないふしきな声だが、とても澄んでいる。

よく見ると田元も怖いくらいに綺麗で、深い青の瞳が宝石みたいだった。並んだら、フューアの深緑の瞳にも劣らないかもしない。その神秘的な様子に、紙芝居ではなく話し手にばかり注目している若い男たちもいるくらいだ。

「あ、フューア」

人々の間から彼女の姿があらわれた。

よかつた、あいつ、大人しくしてたみたいだ。ぼくは心の底から安堵する。

フューリーは紙芝居に見入っていた。そつが、絵なら理解できるんだな。この話はちょっと難解そうだけど、絵そのものを見るのは楽しいのかな。

「『お母さん、わたしの本当のお父さんは蛾^がなのねーわたし、本当は蛾^がの幼虫だったのね』蝶子は泣き叫びました。

『違つのよ蝶子、あなたはガとチョウのハーフよ、ガ・チョウよー！』

『いやよ、そんな鳥みたいなのツー！』

すげえ変な話だな。つて、ひそかにツツツミを入れながら、ぼくはフューリーの方へ行った。

ぼくの顔を見ると、彼女はふいっとそっぽをむいてスタスターと歩き出す。

「ちょっと待てよ

しかたなく、ぼくは後を追った。

「見つけた……」

去っていくぼくらを見つめながら紙芝居屋がこんなことをつぶやいた。

でも、そんなことぼくらが知る由もない。紙芝居をこちばん前で見ていた女の子が、不思議そうに小首をかしげた。

「おーい、おまえら何してんだあ

声をかけられて、ぼくは振り返る。

「フューリー

彼女は「ひへりとうなずいて、壊れたやかんから口を離す。

「ちょっと探し物、してるだけでーすー！」

「ぼくは入り口に向かつて叫んだ。

「ああそつか、まあ、頑張れよー」

「どーも」

ぼくらはいま、市場から徒歩10分の「ゴミ捨て場の倉庫にいる。とりあえず、そこらにあつたガラクタを適当に食わせたんだけど、へそを曲げたフューアイも何とか機嫌を直してくれたらしい。このころになつてようやく、彼女はぼく以外の前で食事しちゃいけないってことを理解してくれたみたいだ。

「でもこれじゃ足りないだろ、やつぱ神殿跡に行こう

こいつ、金属も食べるみたいだけど、あの白い石が好きみたいだし。外に出て、持つていたメモ帳に神殿の絵をかくとフューアイはにっこり微笑んだ。

「なんじやこりや」

石畳と階段の道を歩き続けて目にしたのは、神殿に続く長い階段に張り巡らされた太いロープ。そのまえには軍服を着た体格のいいおっさんがいた。ほかにも2、3人の軍人がいる。島の北には基地があるから、軍人そのものは珍しくないんだけど、この小山とはミスマッチだ。

「いつたい何事なんですか？」

ぼくが尋ねると、ロープ付近のおっさんは一瞥くれただけでなにも言つてくれなかつた。なんだよ、感じ悪いな。

「行こう」

ぼくはフューアイの手を引いて、いつたんその場から引くことにした。

「あなたたちも、追い返されたましたか」

階段からすこし離れたベンチに腰掛けていたら、頭の上に声がふつてきた。イントネーションから異邦人つてわかる。

「ええ。感じ悪いつすよね、あいつ」

ぼくがいと、異邦人は首を傾げながらすく穩やかに笑った。黄みのある肌の、20歳くらいの男の人だ。黒髪が異国を感じさせる。「ワタシ、シドウ・リュウ」とます。あ、シドウが姓です。よろしく

そういうて右手を差し出したから、ぼくらは握手した。

そのとき、フューアイがこうつぶやいた。

「ラム・ア・ヴィアヌス」

するとシドウさんが驚いたように息を呑む。

「どしてそれを？」この国来て、ワタシその言葉、知ってる人、初めて会いました」

「なんですか、それは」

ぼくは間髪いれずに聞いた。

「母國な祈りの言葉なのです。ワタシ、この上の神殿の像に、いつも故郷のこと想つてお祈りしてたです。まさか、こんなとこでその言葉、聞くなんて…。ほんと嬉しいです。で、その方でいつたい…」
ぼくは質問に答えるどころじやなかつた。頭の中がグルグルまわる。
ちょと待てよ、てことは何か？その言葉を知つてるつて事は、やつぱりフューアイ、おまえがあの石像つてことなのか。

ぼくの動搖をよそに、シドウさんはフューアイのことを見きたがつていて。でもさ、

ほんとうに聞きたいのはこっちのほうだよ。

「お答えたくないなら、無理に聞きません。でも、お会いできてよかつたです。あの、ようしかたら、ワタシとすこしお話など、してくれませんか。その言葉、聞いたら、そこはかとなく、昔話とかを聞いてほしくなりまして」

「べつにいいですよ」

そういうと、シドウさんはすく嬉しそうに微笑んだ。外国人と話す機会なんてめったになることだし、視野を広げる絶好の機会かなって思つたから、ぼくはシドウさんの話を熱心に聞いた。シドウ

さんは母国について、詳しく教えてくれた。

シドウさんの国、カケロアはこの島からすりつゝと東の大陸にある小さな国だ。黒髪黒目^{くろまつ}の單一民族の住まつ国で、外交はあまり無いところ^{ところ}。この時代にあって、宗教が重きをなし、王が民を治める縦社会らしい。ぼくの住む国は政府が治める間接民主制で、宗教も盛んとは言えないから、その様相はあまり実感を持つて想像できないけれど、とにかく厳肅とか厳格とかそういう堅苦しい言葉が頭に浮かぶ。

「ワタシの国、とても貧しい国。身分、低い人は明日の命も保障ありません。でもワタシ、故郷のこと愛します。この国みたい豊かなつてほしいです…」

ぼくはそこ^{そこ}が府に落ちなかつた。貧しい国なのに、愛している? 大事なのに、どうしてここにいるんだろ? ぼくの疑問をくんだけつに、シドウさんは続ける。

「いくらワタシのことばくんで、ワタシ慣れた土地いつても、あの国いたら家族、飢え死ぬ思たのでした。3年前、隣の国としている戦争^{せんそう}か激しいなつて、ワタシのところ^{ところ}召集令状^{しゅうしよめいじょう}、来たとき決意しました。家族、連れて遠い国逃げよつと…」

「そうして正解ですよ」

ぼくがいつと、シドウさんは渋面^{しづめ}になる。よけになこと、言ひちやつたかな。^{ぼくは首をすくめる。}

「それで、密^{みつ}航^{こう}船^{せん}、乗つてこの国とこ^こに逃げよつしたんです。でも警察^{けさつ}にわかりました…」

「それで?」

ぼくは恐々先を促した。

「ワタシ以外、みんな…捕らえられしました。母も妹も弟も…」場に、一気に暗い空気が流れた。その気まずさに、ぼくはなんていつていいかわからず^{わからず}に固まつていた。どうしよう、今なんて言つてもおこがましい氣がする。

「ああ、そんな顔、しないでください。でもワタシ、きちんと希望

のこと見つけましたから」

シドウさんていい人だな。助け舟をだしてくれた。

「なんですか？」

ぼくは先をつながせた。

「この上の女神像です。仕事場の工場は朝早いです。夜も遅いです。で、今日まで様子を見に来るしませんでした。あの女神像、ちょっと母、似る気がして、とても好きに思います」

ぼくは今度こそうべき言葉を失った。その女神像、この人は今はもう上にないことを知らないんだ。昨日の新聞にも神殿大破つて書いてあつただけで、女神像のことにはふれていなかつた。

そもそもこの小神殿自体がマイナーなもので、ましてや裏の女神像なんかに注目する人は少ない。

「そ、それはそうですか。ところでの階段、どうして封鎖しているんでしょうね？」

ぼくはすこし話題をそらす。

「ああ、さつきに通つた人言でました。1時に軍、この小山のこと見回りするそうです」

「はあ？！」

なんだそれは。

「どーいうことですか？オレ、昨日もここに来たけど特にそんな必要、ないように見えましたけど？」ていうかなんで今更…」

「噂は、ずっと臥せてた神官、『白い不気味なものと、黒いおぞましいものがこの山にいる』っていつたらしです。神殿壊れた賊が持てる変な武器とか、超強力の爆弾人に似てる未知の生物とかも言われてて、それで、島の北の基地から軍、来て動くらしです。アヤシイものすべて調べるて。いいですね、この国、庶民のため軍、動くなんて…」

いや、めったなことでは動かない。なんせそんなに緊急事態があるわけでもないし、なにか起こつても、大体が警察で何とかするものだからだ。かつてない事件がこの平和な島に起きているということ

に、ぼくは思いつきり戸惑つた。そして、その元凶をぼくは知っている。

「い、いったい何なんでしょうね…」

ぼくは引きつった笑顔のまま、フューリーの手を引き足早にその場を去つた。

これもぼくらの知りようがないことなんだけど、シドウさんは懷から青い水晶を取り出して手で覆つた。そしてそれが弱く光を発しているのをみると、

「まさか…どういうことだ」

ぼくの理解できぬ、異国の言葉でひとりごちた。

「まつずいよなあ

こいつのこと、目撃したやつが他にもいる。予想はしてたことだけど、どれだけの人数で、どんな人に知られたかが問題だ。いや、誰かも重要か。

「ティオン…」

ああ、そうだよな。その前にこいつの食事の問題が先だ。現在午前8時30分。1時までにはまだまだ余裕がある。

「さあ、行くかな

軍のおっさん達に見つからないように、頂上へ。かなり大変だけど、小山の裏に回つて登山だ。

「つたく冗談、よしてくれよ」

階段からそれた小山の端、ここもまだ町を向いてるんだけど、ここにも感じ悪そうな軍人がいた。これじゃさらに南東の山の裏手から、小山の裏に登らなくちゃいけない。

「なあ、その辺の石じゃダメなのか?」

試しに聞いてみたけど、フューリーにとつてその辺の石は雑草みたいなものらしかつた。

もつ、いじめできたら意地でも登つてやる。

「ハコ、ハコ、…」「ココ、ココ、…

午前11時。ぼくらは山の頂上にいた。

階段で登つて20分かかるこの小山を、ぼくは汗だくなつて踏破したんだ。ものすごい達成感。それ以上の疲労感。服も靴も手も顔も土だらけだ。あちこちにちいさな枝までくつついてる。

でもまあいいか。目的は達成できたんだから。もう文句ないだろ、フューア。

瓦礫のちょうどいいのに腰掛けながら彼女を見る。フューアは夢中で白い石に噛み付いていた。

よかつた、連れてきたかいがあるよ。ていうかあいつ、のどは渴かないのか？汗かくんだから渴くだろ。ミルクは飲まないけど水は飲む気がする。あ、むせた。水筒くらい、持つてくれればよかつたな。

「あれ」

でもおかしいな。あいつ、たくさん食つてるけど、こんなに神殿がぶつこわれるほどには食つてないような気がする。考えれば考えるほど謎だらけだ。

でも、こうして石を食べる彼女を見ながら、彼女があの石像だつていうことは、じく自然に受け入れられるようになつていた。石や金属を食べる女が元は石像なんて、むしろ普通の女がそういうものを食べるっていうより納得がいく。それに判らない事はそのうちに判るようになるんじゃなかつて、根拠もなく思うのだった。

「そろそろ行くかあ」

大きく伸びをして、ぼくは欠伸をする。なんだか眠いや。早起きに加えて、かなりの運動量をこなしたものだから、けっこう疲れちゃつたみたいだ。今日はもつ帰つてゆつくりしよう。

満腹になつたらしいフューリーが、ふつゝとため息をつく。

ていうか、明日からフューリーをどうやって飼おうかな。ぼくには田下この難題が待ち構えている。それは帰りに歩きながら対策を練るといじょうかな。良策が出るといいけど…。

ガサツ

「大丈夫か!？」

下山の途中、フューリーがこけた。ビーナスの匂いの匂を取ら
れて、足を滑らしたらしく。

「どうしたってんだよ」

フューリーが注目していたほうを見るけれど、特に何も異常はない。
気のせいだよと黙つて先を促すが、彼女はまだ向こうを見ている。
ためしに耳をすませてみると…。

「何も聞こえないな……いや、妙にさわめいてるか?」

そう言つのもつかの間、遠くの草陰から2つの人影が現れた。

「誰だ。お前ら、なぜそこにいる!」

まさか、うそだろ。だつて見回りは1時からのはずだ。

「なにをしているー看板も新聞も見なかつたのか、ここいら一帯は

立ち入り禁止だ!!」

軍人だ。不審なものを探してゐるんだ。フューリーを見られるのは、か
なりヤバイ。

ぼくは深呼吸する。たぶんいつも言えば、ただ立ち去れって言われる
だけのはず。

「すみません、なんにも知らないで山遊びに来ちゃいましたあ!」

「！」

「こっちへ来なさい!…!」

「え!?!」

「身元を確認する!」

なんだつて!/?見回りもだけど、ちょっとやつすきじゃないか?ぼ

くらつて、大人から

見たらほんのガキだろ？どういふことなんだろう。でも、それじゃ
まazi。

ぼくは彼女の手を引き、思わず逃げ出した。捕まるわけにはいかないよ。

滑るように走りながら顔が隠れるように、ジャケットのデカイフードを被り、横の紐をきゅっと締める。視界は狭まるが、仕方ない。

「あ、待て！！」

ぼくらが逃げるもんだから、軍人は大声を出し追いかけ始める。

走りながら、ぼくはシドウさんの言葉を反芻した。なにか、聞き間違いはなかつたろうか。

ああ、さつきここ通つた人言つてました。1時に軍、この小山のこと、見回りするそですよ。

さつき人に聞いた。1時から。

そうだ、そうに違ひない。シドウさんはネイティブスピーカーじゃないんだ。1時と11時を聞き間違えたつてちつとも不思議じやない。

時計を見る。11時25分。軍人の先頭が山の裏に回つてくるには充分な時間だ。下手したら追いつかれるぞ。

「急げ」

ぼくは声をかけ、彼女の手を離す。大丈夫、ちゃんとついてきてる。ぼくは残り少ない体力をふり絞りながら、先を急ぐ。転がるように、前へ。木々に手をかけ、時に蹴り、枝が足に刺さつたのを気にする暇もない。後ろを振り返る。軍人との距離が縮んだ。激しく息を吸い、吐いて、もっと速く、もっと先へ。それでもどかしい、気持ちに対し、脚の動きはあまりにも、おそい。

フューリーを見る。彼女の息はあるで切れていない。

「おまえ、もつと先にいけ！！」

言つても彼女はあくまでもぼくに合わせようとする。畜生、ぼくが

もつと急ぐしかない。

ふと、めまいに襲われる。息を吸い込んで苦しいままだ。足がもつれる。転んでたまるか。ぼくは木に身体を打ちつけ、なんとか転倒を免れる。けれど、ああ、距離がさらに縮んだ。さらに焦ったぼくは、次の瞬間ほんとうに転んでしまった。

そのときだ、ぼくに駆け寄るため、すばやくしゃがんだフューリーのフードがうしろに取れたのは。

「あ！」

声をあげたのは、ぼくと先を行く軍人。ほぼ同時だった。

「白い怪物…」

軍人2人はフューリーのつむじを見て固まつた。ぼくはフューリーの髪をわしづみそのまま彼女が顔を上げないようとにとっさに固定する。

「白い不気味な…」

うわごとのような声。先を行く軍人はすぐそこまで来ていた。ぼくはフードの端から横目で相手を見る。田が離せない、間合いは充分に詰まっている。

次に走り出したらそのときには捕まつてしまつだらう。万事休すか。ぼくは睡ををごくりとのんだ。しかし。

パーン！パーン！

立て続けに一度。

「ぎやあ！！」

「うあつ！！」

「ええっ」

音に続いて、軍人が相次いで奇声を発した。それにつられて、ぼくも思わず声を出してしまつた。

ぼくは目の前の光景に目を疑つた。いままさに、勝利を目前にしたはずの軍人たちが、うめきながらくずおれていいく。そしてすみやかに、動かなくなつた。

「な、なんなんだ、いつたい」

と、横で場違いなほど陽気でのんびりとした声が響く。

「つーん、我ながらカッコ良すぎる助つ人ぶりだねえ
まさか、こいつは。」

「さつきの占い師もどきじやねえか」

「あはっ 神秘的でいいでしょ」

現れたのは、先ほど広場にいた青田の紙芝居師だ。手にはペストル
のようなものを持っている。

「なんで、おまえ…」

あまりにおかしなことが多すぎて、言葉が先に進まない。何をどう
聞くべきか、まるでわからない。

「まあ、そんなに警戒しないでよ。少なくとも、敵じゃないんだか
らさ。それよりも早くおいで。追つ手はこれだけじゃないでしょ？」

「あ、でも」

「そこ」の2人は死んでないよ、わあはやく
ぼくは戸惑いながらも立ち上がる。しかし、

「つづ」

見れば足から血が流れている。さつき小枝が突き刺さったところが、
いまさらながら痛みだす。

「仕方ないなあ」

紙芝居師はぼくのそばに来て、助け起こしてくれた。

「このまま走るよ。君も付いておいで」

今度はフコートに立つ。しかし彼女はすこし距離をとつ、且つ素
振りをみせる。

「フコート」

ぼくがそういうと、やはりかなり躊躇するように、彼女はこくりと
うなずいた。しかたないだろ、いくら胡散臭くても、今はこいつに
頼るしかない。

「ねえ、じばらぐ息をとめられる?」

紙芝居師は脈絡もなく聞いた。

「はあー?」

「まあ、ちよつと我慢してよ」

すると占い師はいつたんぼくを木に寄りかからせ、袖から紐の付いた鈍色のピンポン玉のようなものを取り出すと、すりあわせて火を付けた。

「はい、息止めて~」

そしてもと来たところに投げつけた。それが落ちたあたりから、煙が舞い上がる。

「あの煙、あまり吸わないようにな」

ぼくはフローイの鼻と口をおさえ、そのまま睨みつける。離すと息を吐いたので、再度同じ事をしたら、ぼくの言わんとしていることを理解したみたいだ。

「ちよつと急ぐよ

紙芝居師はぼくを支えながら、歩調を速める。そのあと向回があの玉を投げながら、ぼくらは先を急いだ。

Chapter 4 迷走のち迷宮入り

「痛つ、う、いってえ…」

足に刺さった小枝が引っこそ抜かれる。

「はい。男の子、そんなにわめかない」

どつかのオバちゃんみたいに言つて、紙芝居師は手際よく包帯をする。それから包帯を巻き終えて、

「きつくない?」

と聞く。足に巻かれた包帯は、きつてもなければ緩くもない。

「大丈夫、丁度いい。あの、ありがとう」

ぼくはぎこちなく言つ。

「どういたしまして」

紙芝居師は、綺麗な両元をほころばせた。

今ぼくらは小さな山小屋の中にはいる。それは神殿の小山の、北西の山奥にある簡素なものだ。何もないから、ちょっと汚いんだけど、ぼくらは床に座っている。

「ほんと、逃げ切れてよかつたねえ」

さつき投げた玉は催眠のためのもので、人体に害はないという。煙が広がってからしばらくは漂い続けるらしく、効果は持続するらしい。

「最初の2人には何をしたんですか」

「あれも睡眠薬だよ。軍人さんにピンが刺さつてるのを見なかつた？」「う、ピストルみたいのでパンツ？」

すると紙芝居師は銃を撃つ仕草をしてみせる。

「あの玉だと、煙の効果が広がるまで時間がかかるから撃つたんだ。そんなに吸わなくたって、極端に効く人も中にはいるんだけどね」フューリーがその極端に効く人（？）だったらしく、部屋の隅でぐつすりと眠っている。

「たぶんあの後、銃声じみた音に釣られた軍人たちが、あの煙にいっぱい引っかかったと思うよ」

そこまで計算済みだつたのか。

「んでも早めに町に帰つたほうがいいね。顔は見られてない？」

「ええ、たぶん」

「なら、まあ大丈夫かな。足は平気？」

「はい、ちょっと休んだら歩けると思います。あいつ、起こさなくちゃな…。あの、あなたは…」

そう、この人は一体全体何者なんだろう。なんであんな場所にいたのかな。ていうか、後をつけられていたのかも知れないし。「ちょっと待つてね…」

それから紙芝居師は被つていたフードをうしろにやる。

するとつややかな黒髪が現れた。後ろ髪がうなじのあたりまでの長さだ。ぼくとそう変わらない。

さつきはフードで隠れていた額飾りも姿を現す。血赤の石。澄んで

いるが、ルビーとは違い、ヒスイのように清楚なものだ。ワンポンメントのピアスにも同じ石が使われている。サファイアの瞳にあつらえたように映える。

次に目より下を隠していた布をはずす。

「あ…」

思わず声が漏れた。その姿のあまりの美しさに言葉を口を奪われるつてやつ。まるで人間じゃないみたいだ。肌なんかフューイ〜くらい白いくて、唇は赤みをおびてる。薄く化粧を施してるからか、妙に艶めいてる感じ。こうしてすべてを見ると、田元なんかよりいつそう魅力的で、見つめられると顔がほてる。

「あらあら、可愛いねえ。でも…」

紙芝居師はこけらに視線を絡ませながら、妖しく微笑む。

「そんなに見つめられたら、さすがの、俺、でも照れちゃうな

紙芝居師は聲音を低めて言った。

「は？」

ぼくは目を見開いて、ついでに口までおっぴろげたまま責めた。

「やだなあ、そんなに驚かないでよ」

声のトーンを元に戻し、紙芝居師はけらけら笑う。驚くなとは言つが、ぼくの様子が面白くてたまらないといったふうだ。確信犯で意表をついたのはあきらか。

「なにそれ、なんだそれ。俺？てことは、あんた男ってこと？はああ？まじかよ、うそだろ、だいいち、その化粧はなんなんだ」

息も絶え絶えにぼくは抗議する。すると紙芝居師はさらに身体を折つて笑いまくる。

「あは、苦しい。いいねえ坊やは、反応が素直で……。あはははは」
もうなんと言わてもショックは隠せなかつた。

けれど考えてみれば、ぼくの全世界であるこの国周辺の風俗的には女性は長い髪にスカートなのが普通だ（といつことはフューイの今格好はひどく常識はずれ）。社会で習つたけど、もっと遠くの地域でも、だいたいそんなものって聞いたことがあつたから、この人

の髪と服装から性別くらい判断すべきだつたんだ。

といつてもこの紙芝居師の服装は、女性の風俗でないパンツ（ズボンを指す）着用で女物の濃い紫のとんがり靴。たぶん女物の薄紫の

「一ト。

だからやつぱりあなたがちばくのミスジヤッジとも言いつ切れない「うな、なんというか、端的に言へばへんな格好なんだ。

なんと思えばいいんだろう。ぼくは眉をしかめてうなる。

まあ、見るよう見れば妖つしに美少年に見えなくもないけど、でも…うーん。

「け、化粧は無いんじゃな…」

「あは、よく似合つでしょ」

なんかもひ、なんともいえないよ。

ぼくは忘れていた疲労感を思いきり思い出してうなだれる。

「ところで坊や、もつと大事な質問があつたんじゃない？」

そうだ、変なところに気を取られて、肝心なことを聞き忘れてた。でもその前に。

「坊やとか言つなよ。オレとあんた、そう違ひないだら」

紙芝居師は見たところ15、6歳くらいだ。

「君いくつ？」

「14」

「……………くえ」

「なんだその間は」

「若見えも、しきるると氣の毒だねえ」

「ああ！？」

なんだよそれ、小さいからか？このオレがつ。

同情されると余計腹立つよ。童顔だつて、大したことないと思つてたのに。

「まあ、それは置いといで」

「置いとけるか」

投げっぱなしにも程がある。なんかもう、ショック続きでやんなる

ため息をつくぼくを見ながら、紙芝居師は微笑んでいる。というか、これが定番なのか、ずっとこの表情だ。どこか掴みきれない、不可思議な微笑み。

得体の知れなさに余計に拍車がかかる。

「まあ落ち着いて」

そう言われて、ぼくは咄嗟に反抗しようとするけれど、目で制される。

黙れ、と。

青い瞳の奥の何かが語る。

それはほんとうに唐突なことだった。

空気が急に変わった。

どう変わったのかはわからない。けれど、あきらかに違う。ぼくはその変化に付いていけず、目を泳がせた。

こんな空気は感じたことがない。

突然なんなんだ、からかっているのか。

探るように、相手を見つめてみる。

いや、戯れなんかじゃない。

本能が悟る。その危うさを。

先程までの紙芝居師とはまったく異質。まるで人が変わってしまったように印象が違う。

満足したように、紙芝居師はぼくをじっと見据えたまま、紅い口元に笑みをたたえる。

その笑みの鋭さ、そして冷たさに、ぼくは背筋を凍らせる。

「埒が明かないから本題に入るよ」

ぼくはうなずくこともできずに相手を見る。

それを肯定と取ったのか否か。

目の前の相手は、ぼくが抱いていた質問を、先読みながら続ける。

「『俺がなぜあの場所にいたか?』答えはね、俺は君たちを市場か

りあつとつけていた

「…ああ」

ぼくは噴き出した冷や汗をぬぐわずひたすら動作が、じりしても止まなくななる。

「それはわかつていいようだね。『じゃあ田的は?』きみが何をおいても、俺の何が気になつても、知らなくちやいけなかつたこと。それも第一に、迅速に」

「なにが、言いたい」

ゆつくりと言つ。ひびく、いやな予感だ。

なぜか、話が結論に及ぶのを先延ばしなくちゃいけない気がする。時間を稼ぐために。いや、そうしなきゃ、危ないんだつて頭の奥から聞こえてくるようだ。

「別に君が愚かなわけじやないんだよ。この国はほんとに平和なんだなつて思つてね。ピンチに見舞わたからつて、俺が敵じやないと言えばすぐに頼る。助けられて、どこか疑いながらも信用しあげる。軽口につけられる……」

「それが、じうした

言いながら、ぼくははつきりと危機感を抱いていた。

沈黙に、心臓の音だけが耳に響く。

そして深い後悔にも襲われる。

どうして警戒を解いた。ここでのいつのいつのいつ、平和ボケしてるのはわかる。

けれど追われるなんていう非常事態に、なんでもうしてしまったのか。

なんで、じうして。

そうだ、どうしてピンとこなかつたんだ。

ここつも、なんらかの理由で。

「フユーリを、狙つてるんだな」

紙芝居師は上がつてこむ口角を、せりと引き上げて、歯を見せる。肯定。

その笑みはそう告げる。

ならば、ぼくは。

邪魔な者だ。

「オレに顔を見せたのは…」

いままさに、始末してしまったから。

見れば、音もなく据えられた銃口。

金属音。

相手はリヴォルバーをもてあそぶように回し、収める。

「さよなら、坊や」

ぼくの目は見開き。身体はふるえることあり忘れる。

声すら出ない。

息は止まり、心臓だけが最後だといわんばかりに早鐘をうつ。

いつだ、銃の音がするのは。

いまか。

ぼくはきつと目を閉じる。

パン

刹那、視界が朱に染まった。

chapter 2　更新（後書き）

はじめにお読みいただき、誠にありがとうございます。これからも『ぼくらの島』は邪道を突き進んでまいります。最後までお付き合いいただけましたら、恐悦至極にござります（――）では、またの機会に（（ゝゝゝゝ））

chapter 3 迷宮の入り口

ああ、暗いな。

でもすゞぐ気持ちいい。

ここはどこなんだろう。天国かな。天国って思つたより暗いんだ。
でもいいや。こんなに気持ちいいんなら。

『ティオン…』

おや、声がする。

『ティオン…』

そういうえばオレ、そんな名前だつたな。

『あ、君そんな名まえだつたんだねえ』
なんだ？

『ティオン？』

なんかおかしくないか。

『ティオン、はやく起きなよお』

なに言つてんだ？誰が寝てゐつて……と思つて試しにまぶたを開けてみると、と、

「う、うわ」

目の前に青い瞳。

ぼくは咄嗟に起き上がり、すわつたまま壁まですつ飛んでいった。
所要時間、およそ3秒。

「動き、早あー」

のんびり言つのは黒髪の紙芝居師だ。さつきぼくを殺したはずの。
ぼくの身体が恐怖を覚えているらしく、呼吸が荒くなる。心臓はバ

クバクだ。

「ふつ…あははははは」

「???」

訳がわからなくて混乱したまま、ぼくは呆然と笑い転げる紙芝居師を見ていた。

「くくつ……ああ、ティオンー君つてほんとに最高っ」「じつと手を見る。

「なんで……オレ、生きているのか」

すると紙芝居師は一瞬真顔でこちらを見る。それもつかの間、再びはじけるように笑い出した。腹をかかえて床に横たわり、目の端には涙まで浮かべて。

ぼくはとことうと、展開についていけずニアホ面をしている。隣にはフユーライが無表情で、（本人としてはおそらくかなり心配を表した表情だらうが）紙芝居師とぼくとを交互に見ている。

「おい」

ぼくはやっと気がしつかりてきて、低い声で言った。

すると紙芝居師は起き上がり、「なあに」と答えた。

「どうじつ」となんだよ、これは」

聞けば紙芝居師は笑いを収め、定型の微笑みに戻すと、床に置かれているピストルに手を伸ばす。

「あー！」

ぼくは驚愕の声を出す。その銃口からは、色とりどりの紙製のリボンが飛び出してくる。よく見ると床には細かい紙ぐずが集められている。

「オリジナル・クラッカー弾 種も仕掛けもござりますう」

紙芝居師は、マジシャンが種明かしするみたいにリボンをつまみ、ぼくに見せつける。

「人間の思い込みって面白いよね 死んだ氣になつて氣絶しちゃうなんてさ」

「なつ」

なんだそりゃ　――――

ぼくの絶叫で、山小屋の周りの小鳥たちが飛び立つた。

「な、おま、そ、なんのつもりだシシ」

声も枯れんばかりに叫ぶと、紙芝居師は最高に可憐に子ぶった笑顔をつくる。

「 もちろん、ただのお遊び　」

「　　シ　」

ぼくはもうこわい、声にならない声で絶叫した。

もうなんと言つても遊ばれるだけのよつた氣がする。それもかなり悪趣味な方法で。

それにしてもわつきの冷たい田。殺氣ばんだあの空氣。それはまやかしなんかじやない。ぼくにだつて、それくらいはわかる。

いつたい何が本気でなにが冗談なのか。

はつきりしたのは目の前のこいつが只者じやないって事くらいだ。

「そんな深刻な顔しないでよ。冗談だつて言つたでしょ。あくまで俺は君らの味方だよ」

「 それは嘘だ」

ぼくは断言する。紙芝居師は『おや』と首をかしげる。流した田が、面白そうに先をうながす。

「 せつしおまえの言葉は、[冗談なんかじやない。おまえは味方なんかじやない。それにおまえは、本当にオレを殺そとしたりう。そのふざけた態度はやめる。おまえの田的はなんだ」

紙芝居師はしなを作るよつて、軽くうでを組む。

「 いい感じ、ちゃんと学習してゐじやない。ものには裏があるつて事を…。でもね、これ見て」

紙芝居師はピストルのリコールバーを横にスライドさせる。そしてぼくに銃口の裏を見せる。ぼくは息をのんだ。

「ひとつが仕掛け入りの弾、このカラの部分に入つてたクラッカー
のね。後は実弾。かなりの確率で君は死んでた。こんなふうに、裏
はけつこう複雑」

「何のために」

「ちょっとした運試しだよ。君にはやっぱりなにかの加護があるん
だね。うーん、やっぱり俺、君たちの様子を見守ることに決めた
話がまったく見えない。

「まだるつこしいから色々とほんほん話しかけやうナゾ、それはもう、
そういうものとして理解してくれるかな。気の進まない質問には答
えない。とりあえず歩きながら話そつ」

chapter 4 ぼくの知らない世界

時刻は午後1時。ぼくは10分ほど氣絶していたらしい。

ぼくらは市街地の北東側である第7区を目標し、街の北側の山から南下している。ぼくの住む4区からは歩いて1時間はかかる場所だ。追っ手がいるのでぼくは非常に複雑な気持ちながら、紙芝居師に従つた。

こっちの山の中は、神殿の小山よりもずっと暗い。それでも細い山道がかろうじて残っていた。ぼくの足は固定されて落ちついているのか、そんなに痛まなくなっていた。ぼくらは3人で縦に一列になつて、先を急いだ。

「マジで、わけわからんねえな」

紙芝居師はフューライを狙っていることをあつたりと認めた。でもぼくを、どうこうするつもりはないらしい。

「だから結局おまえはなんなんだ。敵なのか、味方なのか」「どうせらとも言えないよ」

ぼくは抗議するため口を開きかける。しかし。

「あえて言つなら、今は、味方だよ。フューライが誰かに取られるのはまずい。だからこうして君と逃げてる」

「じゃあ軍を撒いたら敵になるのか」

「そういう意味の、いま、じゃない」

たぶん、もうすこし長いスパンの、いま、か。いつまでが味方か、ぼくに見極められるだろつか。いや、こんな不得体のしれない奴のことだ、見極めなきや、命の危険があるかもしれない。仮に見極められても、ぼくが対処できるかは別だ。なんだよ、万事休すなのはちつとも変わつてないじゃないか。なんとか策は練れないものか。とりあえず、こいつの話を聞いていくしかない。情報収集から、なにか突破口を見出すしか……。でもどこへ向けて？ なにがいまの

ぼくらにひって最良の策になるんだりつ。

ぼくはフコーアイをどうしたいんだりつ。いや、どうすべきなんだろ
う。ただ、軍に捕らえられるのはマズい氣はする。やうだ、まずは
軍が……。

「…………軍は、なんでフコーアイを狙つてゐるんだりつ」

先頭を行く紙芝居師の背中に向かつて言ひ。

「別にフコーアイを限定して狙つてるわけじゃないんだりつね。だれ
かに聞かなかつた？ 軍は不審なものを探してゐるつて」

「じゃあ軍がいま探してるのは、不審なオレらか」

「そう。こまはね」

「でもあの時は逃げるしかなかつたんだ。でもなんなんだ、あの異
常なまでの警戒つぱりは。やつら、なにがしたいんだよ。ていうか、
その不審なものってなんなんだ？」

「それはまだ、俺にもはつきりわかんないよ」

「なんだよ、全部知つてゐみたいな顔して」

「あは」

「で、おまえはなんでフコーアイを……」

「狙つてるか？ まあ、それに答えるのは時間がかかるから言わな
い。いまは面倒臭いし」

「ふざけるな」

憤るぼくに紙芝居師は何氣なくこいつ打つた。

「そもそも用があるのはフコーアイじゃなくてフコーアイの女神像だつ
たんだけどな」

なんだと。

ぼくは立ち止まり、前を行く紙芝居師を睨みつけた。うしろのフコ
ーアイがぼくの背中にぶつかる。紙芝居師も立ち止まり、こちらを振
り返る。紙芝居師はフコーアイよりもすこし背丈があるから、ぼくは
ちょっと見上げるかたちになる。

「おまえ、どこまで知つてこむ」

「俺の予想だと、たぶん君と同じくら」

「答えになつてない」

「君こそ、質問になつてないよ。君は何を知つてゐるの?」

ぼくらは黙つて対峙した。弱い風だけが、その間を通り過ぎる。紙芝居師が、また歩き出したから、ぼくらもまたそれにならう。

「こいつはやつぱりあの女神像なのか」

「そうだよ」

「オレは、なんとなくそつなんじやないかって思い始めただけだ」「そう。それだけ?」

「ああ」

「じゃあ、俺とそんなんに変わらないね。ただ俺は、その女神像がそのフコーアイになる瞬間を見たんだけど」

「? ? ?」

「どういう原理かはまったくわからないよ。ただ3日前の夜明け前、女神像を持ち出しあつとした……」

話によるとそのときに音もなくまばゆい光が溢れ、その光で紙芝居師はしばらくの間 気絶したそうだ。気がついたら人の姿のフコーアイがいて、石を食つていたらしい。

それで、昨日の夕方まであの山小屋に捉えていたといつことだ。そのあとフコーアイが逃げ出してぼくに見つかったんだから、こいつは鳴民に田轟されてないんじゃないのかな。

「……で、そのときに誰かが見ていたのに気がついて、俺はフコーアイを連れて逃げたんだ」

「噂から言つとその誰かつて神官だろ。そうだつた?」

「たぶんね」

「神官が見たつていう由と黒の不気味な何かつて、おまえらのことだつたのか」

「俺は全身黒ずくめだったし、フコーアイのほう、その髪

紙芝居師は振り向いてフューリーの方を向く。

「それで噂の印象から思うに、未知の何かが怪しいからって軍が動いてるみたいだけど……」

そのことだつたら如何にか策が練れそうだ。先を続けようとしたら紙芝居師が制した。

「もしかしてそれを突き止めるか、神官がそういうものだと見間違えたようなものを捏造ねつぞうして軍に差し出せば、逃避の必要がなくなつていいとか考えてない？」

「なに？　ダメなのか？」

結構いい手だと、おもつたのに。といつが、こいつにはぼくの考えなんかお見通しなのか。なんか無性にくやしいよ。

「でもそんなのおかしいでしょ？　オカルトが支配する国でもないんだし。それ相応に地に足のついた理由があるはずでしょ。以前からなにがあるはずだよ。彼らが納得するような、何かが。でも彼らはその何かの正体をはつきりとは知らない……いや、知っているのかもね。神官の証言は何かのきっかけの全てじゃなくて、幕開きの最後の一押しだった。……なるほどねえ、わかつてきた」

「なにが？」

「教えない。言ったでしょ、気の進まない質問には答えないって。それに、ティオンが知つても結局どうしようもないことだよ。話も横道に反れてめんどくさいし」

ぼくは舌打ちをした。こいつが勝手に、今のぼくにとって必要ないと判断した事柄は絶対に話さない。

ほんのちょっと掘めてきた。こいつはこいつして気になるように話をかすめて、それで相手の反応を面白がるような、胸クソ悪いタイプの奴だ。

だったら、意地でも聞き返すもんか。

そんなぼくの様子を見て、紙芝居師はくすっと笑った。

ああもう、どうしたつてむかつくヤローだ。

「なあ、でもおまえフューリに逃げられたんだよな。そういうの」「

間抜けなんじやん」

これでどうだ。言い返したぞ。

紙芝居師はゆっくり振り向く。一瞬だけ、ぼくは怯んだ。でも、言つちゃつたもんは仕方ない。

「そうそれ、それなんだよ！」

意外な反応に、ぼくはべつの意味で怯んだ。

「この子俺の言う事は、何をどうしたって聞かないんだよ。一切従おうとしないの」

「セリヤおまえがひどいことでもしたんだろ？　で、おまえはあいつの事どうやって捕まえてたんだよ」

「ああ、それは俺が光を見て氣絶したあと……」

「そこまで話、もどるのか

「まあ聞いてよ」

これも話によると、紙芝居師が氣づいた後、瓦礫の中でフューリーの食事風景を見たらし。ライが言ってた歯形はこのとき付いたんだ。神殿はフューリーの光にやられたんだろうな。いつたいこいつは、どれだけの力を秘めた生き物なんだろう。怖すぎる。

「で、こんな小っさい女神像が人の姿に変わつて、石まで食つてゐところ見てどう思つたんだ」

女神像の身長（大きいりん）縦に3・4個分の大きさ）を手で示しながらぼくは言った。

そしたら紙芝居師はあつさりこつ答えた。

「じつこつとも、あるのかなつて」

（本人いわく、とつても建設的な考え方から）狙つてた女神像が姿を変えたならそれを捕まえればいいと思つたらしい。

その方法だけど、宝石を餌にフューリーを釣つたみたいなんだ。その

間抜けそうな様子に、ぼくは思いつきついた。このフューリーなら、ありえるなって。彼女のほうを見ながら思つ。

「おまえ、食い意地張つてるもんな」

それにさつき市場で翡翠に釘付けだつた。

それで釣り続けていたことに業を煮やし、逃げ出したつて話だ。

「待てよ。なんでフューリーが宝石に釣られるつてわかつたんだ」

「それはね。むかし古文書学に詳しい知人に『石を食らう神さま』の話をされたことがあつて。あ、もしかしてこれかなつて思つたら、確かめてみたんだ」

「…………」そこでさういつ発想に飛ぶのが……いや、なんでもないよ」

こいつの価値観といふか常識はぼくとはまるでちがつ。でもそのおかげか、紙芝居師の見解はものすごく的を射てゐる。だいいち、大切なことがわかつた。その古文書の中にフューリーの秘密が隠されているつてことだ。

「古文書には他になんて？」

「よく覚えてない。昔ちらつと話されただけだし」

「書名は」

「だから、しらなーい」

役立たねーな。

「それで話戻すけど、なんでフューリーはティオンの言つことをあくべの？」

紙芝居師は小首をかしげてみせる。

「いや、わりと好き勝手されてるぞ」

紙芝居師は、ぼくの目をじっと覗き込む。眉をしかめて、怪訝そつな顔をする。口元が笑んだのままなのがおかしい。

「でもわざと従つてゐるよつに見えるけど? 襲いかかられたりしないでしょ」

そんな質問をしてくるといふことは。

「お前、襲撃でもされたのか?」

ぼくが言つと、紙芝居師はこくりと頷く。

「いま、膝のあたりにヒビが入つてゐる。飛びかかられて、怪我しちやつた」

「やうか……」

どうやらこじ2日間の2人の共同生活には凄まじいものがあつたらしい。いわく、その苦労話で（そんなもん読みたくないけど）本が1冊書けるくらいには。というか、このフューアイって奴は、やっぱり凶暴な怪物なんだ。光で神殿を壊したとかいう話より生々しく思えて、ぼくは昨日そばで寝たことを思い出すと今更ながら身震いした。

「なにをどうしたら、やうなるんだ」

「フューアイをつれて島を出ようとしたら、こんな日に遭つたの。この子が船を見た途端の悲劇でさ」

にこりと、足を指差す。

「そんなんで歩けるもんなのか」
ぼくが言つと。

「しつかり固定してあるし、大丈夫だよ」
でも紙芝居師の盛つているケース型のかばんはかなり重そうだ。しかもさつきはオレの事も支えて山道を歩いていた。しかしこいつは涼しい顔でピンピンしている。きっと、身体の構造からしてこいつはなにか普通じゃないかもしない。

あと、聞き捨てなら無いことが。紙芝居師は島を出ようとしたら用があるのはフューアイの像だとも。だとしたら紙芝居師の正体は、盗賊のようなものなのか。

それならこいつの目的は、フューアイを元の像に戻すことなのだろうか。

といつより、考へるべきはまず奴が島を出ようとして失敗したという点だ。現時点では島にいるんだから、フューアイを連れてここから出て行くことが紙芝居師の狙い。でもあれ、待てよ。

「フューアイに睡眠薬でも使えば、島から出るのなんか簡単だつたん

じゃないのか？」

「薬が効くなんて、さつきわかつたことだもん」

なるほど。それにいざ連れ出したとして、フューライが人間の姿のままだつたら暴れて大変だろうってことか。それなら当面、打開策は模索中ということだらう。

「また話戻すけど、俺が思うにティオンってフューライの主なんじゃないかな」

「なんでもまた」

ぼくは首をひねる。そして舌打ちした。

話が戻ったと「うよりも、すつ飛んだ」という印象だ。

こいつの語り口は聞いていて腹が立つ。ハナから話題をぽんと投げかけて、あとから付け足していくような。

「その古文書の話ではたしか、その神様は誰かに使役されてたような気がする。思い当たる節はない？」

思い当たる節と言われても、急には思い浮かばない。ぼくは考える。

そういうえば、こいつはぼくの名前をはじめから知っていたよつな。子供のころからだつて像の前で名乗りをした覚えはないのに（そんな変なガキじやなかつたはず）。しかも現れたのがぼくだつて分かつたら逃げ出すのをやめた。紙芝居師の話を聞けば、ぼくに従つてると思えなくもないし……。

「紙芝居師に対してだけ反抗的だつたってことは？」

「思えないね。そんな下手なやり方はしないもの。この俺が扱えないなら誰でも無理だよ」

すごい自信だけど、あながち過信とも思えなかつた。相手をたらしこむの、「うまいよ」といつ。実際こいつが悪ふざけで、ぼくのこと擬似殺人して見せなければ、ぼくはこいつのこと、もつと信用していつたろうじ。なんでもまたあんな遊びなんか……。

ちがう、思考がそれた。ともかくどういうわけか、フューライがぼくのことを主人つて定めたつていう考えは、事の流れから言えば辻褄

が合わないとは言い切れないようだ。

「たぶんそれは、運命として決まってた事なんだよ」

「運命?」

「そう。つまり、君は女神使いになるべく生まれた」「はあ!?

突拍子もない話に、目の前が眩むようだ。

「否定するの? じゃあなんである時、あのタイミングで君たちは出会った? 君は銃で撃ち抜かれなかつた? 君は知らないかも知れないけど、ティオンが寝てる間もう一度リボルバーのルーレットしてみたんだよ。結果は36分の1のスカ」

そんなことを。ぼくは死線を一度も越えてたのか。というか、それが運命の証明になるのか?

「こういう目に見える形で、命が運に左右されるものに君は極端に強い」

状況をまるで飲み込めないぼくをよそに、紙芝居師はそう言いつつ銃を取り出し、机に向ける。

「な、ちょ、おまつ」

「大丈夫」

するとリボルバーをはじいて高速でまわし、すみやかに收め。

力チツ

え、力チツ? ぼくはきつと閉じた目を開けて、とっさに顔の前にやつた腕を、下ろす。

「ほらね

「ほらねじやねえよッ」

「でも何度やつても大丈夫だよ、ほら」

「……って、言つてるそばからまた撃つなッ」

「1296分の1」

紙芝居師はいつそ殺してやりたいほどの可憐らしく微笑んだ。両手をかるくあげて、心底楽しそうなスマイルでポーズ。

「万が一当たつたらどーする…」

「大丈夫だつて。面白いからもつとやわつよ。なんなら新記録目指して」

「誰がやるかッ」

「うーん『加護的には～もう付き合つてられないしい』とか思われてもマズいし、そろそろやめとこつか?」

そう言つて、人差し指をあごの先に当て、困ったようにぼくを見やがる。

「あたりまえだツツ…！」

叫んで、頭がくらくらした。最大級のめまいだ。エクトプラズムを出しながら倒れかけるぼくを、つしろの女神が支えた。

「ありがとうよ……」

もう壊れた笑い泣きをしそうだ。力が入らない。

「さすが役目を果たすための相棒だね。仲いいねえ」

「あ？ なにそれ…」

「だつてなにかが起こり得るから、いまフューライがそんな姿になつたんでしょう？」

「あ」

「そうか。

考えてみればその通りだ。なにもないなら、こんな事つてない。これは、なにかの前触れなのかもしない。むしろそう考えるほうが妥当だ。

「だから、おまえはオレとセツトでフューライを見張るつゝて魂胆なのか」

「セツ」

くやしいけど。

「オレは、オレだけの力じゅつ『コード』と、『ビーフ』のこともできない、だから……」

「己の器量を知っているのはいいことだね。セツ、一緒に謎解きするしか選択肢はないよね」

「オレは……」

なんだろう、突然胸のどこかに何かが引っかかり始めた。それはフコートと出会いから、深い部分に沈んでいながら、けれど確実にあつた何かが急に浮かんできたっていう、そんな感じ。上手く整理できないのが歯がゆい。……違う、認めたくないだけだ。こんなことを思つてゐるなんて。

なんでオレばかりがこんな田に遭つんだ、なんて。

紙芝居師はぼくを見て、この田を見透かすよくな、澄んだ青い瞳が射抜くように見つめる。田を離したところで、どうせぼくの胸のうちなどお見通しだろ。

紙芝居師は口端の方をつこと上げて、意地の悪そうな笑みをつくる。

そうして、まるで幼子をあやすよつた、やさしい声色で告げる。

「君に芽生えた心のもやを、言葉にしてあげる。これは『強制的に課せられた使命、責任、運命』理不尽だよね。君がもしこれから逃げて、何も対処せず、何か大変な事態が起こつたらそれはすなわち君の罪」

「ああ」

「突然のことにどんなに戸惑つても、時間は進む」

そうだ、これは避けられないんだ。自分を哀れんでいるなんて、そんな意味の無いことしていふ事態でもない。そつなれば、道はひとつしかないじゃないか。

ぼくは紙芝居師の視線に応え、挑戦的に相手を見る。決意は固まつた。

「オレは、探していくしかない」

紙芝居師は田を細める。

「やつれ、自分がすべきことを。謎を解きながら。すべてが片付いて、君と彼女の縁が切れるよつなら彼女にこいつ命じて、この俺を主にと。それが前提なら、俺は君の手助けをしてあげる。君と彼女がすべきことを、一緒に探してあげる。俺の目的は果たせるかどうかわからぬいけど」

ぼくは答えない。ふたつ返事で答えてしまったのは、ひどく愚かな気がしてしまう。信用できない相手の申し出には、どうしても慎重になる。相手の言っていることに穴は無いだろうか。半ば誘導じみた話の流れに戸惑う。絶対条件として、こいつがフューライを狙う田的がわからなくちゃ対処のしようも無い。けれどそれを聞いても、さつきと同様『話すのがめんどく』で一蹴されてしまうだろ。ひづりかな、そんなに悪い条件ではないんぢゃない? しばりくは田常に俺とフューライが加わるだけ……」

だまつているぼくに、紙芝居師は重ねて言った。どうせよ、これに同意してみせるしか今は手立てが無い。

ぼくはうなずいた。すると紙芝居師は一見無害な笑みを浮かべる。

「これから、しばらく宜しくね」

(じできるかどうかはわからないけど) こいつにフューライが渡つたあと、どうなるのかはわからない。けれどこいつは、いま、は全面的に味方。確かに裏は結構複雑。

おもしろいぢやないか。ぼくだってそれまでには策を練るよ。おまえの筋書き通りにはいかせない。利用するだけ利用してやるよ。相手は上手。^{うわて}相当荷が重いけど、いや、めちやめちや重いけど、やるつややないね。

chapter 4 まぐの知らない世界（後書き）

お世通しいただき誠に有難う御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799a/>

ぼくらの島 ~a fabulous island~

2010年10月21日20時09分発行